

的外



みのる法律事務所
弁護士 千田 實
〒021-0853
岩手県一関市字相去57番地5
TEL : 0191-23-8960
FAX : 0191-23-8950

みのる法律事務所便り
第353号
令和元年9月

いなべんだべんく
田舎弁護士の駄弁句

52



足許を 照らすともしび ほしくなり
探し求めて 自灯明かな
じどうみょう

令和元年8月28日
青空浮世乃捨

後期高齢者の仲間入りをしましたが、この先どう生きるべきか、が分かりません。先が全く見えず真っ暗闇です。せめて、かすかな灯火を見つけたく、あれやこれやと考えてみました。

宗教の本も、哲学の本もいくらかは読んでみました。ですが、これと言った決定打はありませんでした。

自分で考える他にないと思い、悩みに悩み、考えに考えた結果が、誰でもそう思うであろうという『人生は、いまの一瞬を、まわりの人といっしょに、楽しみ尽くすのみです』という極めて平凡な結論に達しました。これに、『いなべんの哲学』などと勝手に名前を付け、一時も忘れないようにすることにしました。

このように考えるようになったら、この先は、この哲学に従って生きればよいという気になりました。気が楽になりました。この哲学が、自らの足許を照らす灯火となったのです。

釈迦は、死の間際に「先生が亡くなったら、私達はどう生きたらよいか」と聞く弟子に向かって、「自らを灯火とし、自らをよりどころにせよ。私や他者

に頼ってはならない。それでも迷ったら、正しい道理（真理）をよりどころにせよ」と語ったそうです。

自らを灯火とすることを『自灯明』、正しい道理を灯火とすることを『法灯明』と言うそうです。私の哲学の本は、無論、道理などとは言えません。真理でもありません。ですから、法灯明ではありませんが、皆さまが自灯明をつくり出す参考になればと願っています。つまり、皆様がどう生きたらよいかを考える参考になれば、こんな嬉しいことはありません。「こういう考えの者もあるんだ」と思って、自分の生き方を考えてほしいのです。神を信じる前に、自分を見つめてほしいのです。

そのような思いで、『人生は、いまの一瞬を、まわりの人といっしょに、楽しみ尽くすのみです』という考え方を、これまで、『いなべんの哲学—その意義』と『いなべんの哲学—その実践』を発刊し、知ってもらおうとしてきました。ですが、「哲学」という言葉そのものに拒絶反応がありますし、私の書き方が下手ですから、あまり読んでもらっているとは思えません。

もう少し読み易い格好にしなければと思い、『いなべんの哲学—道歌集』を出すことにしました。この句もいずれ『道歌集』に掲載したいと思います。『道歌集その1』は、近日中に発刊します。

『道歌集その1』では、まず30句を掲載します。この句は、その30句には入っていません。『その2』で掲載したいと考えています。30句に限っても、一回に通して読み切ることは時間がかかり、負担となりますので、少しずつ、ちょっとした合間に、一句だけでも読んで戴ければ幸甚です。合間を活用して戴ければ幸甚です。

一句毎に読み切りができますので、一日一句などという読み方をして戴ければ、一か月で読み切れることとなります。どうか、『いなべんの哲学』（白い本シリーズ）の道歌集にお目を通して下さい。そして、「いまの一瞬を」、「いっしょに」楽しみ尽くしましょう。

い な べ ん だ べ ん く
田舎弁護士の駄弁句 ⑤3

子供が知り 子供が選び 子供がやる
それを見守る 塾あり嬉し

令和元年8月29日

青空浮世乃捨

私は、塾で勉強した経験はありません。高校を卒業するまで、学校以外で勉強したことがないので。そもそも、私の育った岩手県東磐井郡大東町大原（現在一関市）には、塾はなかったのです。高校を卒業するまで塾という存在すら知らなかったのです。

これまで塾というところは、受験勉強のため、子供達に知識を詰め込む場所だと思っていたのです。ところが、今回、目から鱗うろこが落ちるように、いままでの塾に対する見方を変えなければならぬことに出会いました。その塾の先生の教え方が素晴らしいのです。この先生の教え方を知り、これこそ、私が理想とする教え方だと心の底から共鳴してしまいました。

小学3年生の孫娘は、1年位前から、近所の『菅原学習塾』（菅原里江先生）に週2回、午後6時30分から午後7時30分まで通うようになりました。長くは続かないだろうと思っていましたが、無欠席です。ジッチが疲れているように思い、「今日は塾を休ませた方がよい」と妻や娘に言っても、孫は「塾は絶対に休まない。塾は面白い。私の楽しみの時間だ」と言うのです。

先日、『もみじの葉とわたの葉』というタイトルのイラストとコメント（解説文）を書いた一枚の図表を作ってきました。塾の時間で作り上げたとのこと。もみじの葉とわたの葉を、大きな紙に貼り付け、その似ているところと、違うところを分かりやすく解説しています。「似てはいるが、よく見ると違いがある。その違いを分かってほしい」と書いていました。私が、「文明と文化

とは、似てはいるが違いがあり、それを分かってほしい」と前号で述べましたが、発想が似ていて「DNA（遺伝子）かな?」、「ジジイに似たのかな?」などと嬉しくなりました。

のみならず、字もしっかりしていて、図と表のバランスも、色使いもコメント文も秀逸でしたので、額に入れて飾りました。ジジイ馬鹿の典型です。

孫は、この塾に通うようになり、塾の庭のもみじの木の隣に、わたの種を蒔いたそうです。そのようなことができる塾は、他にはないと思います。それだけで、この塾の素晴らしさは十分に証明されています。わたの葉が出ました。そのわたの葉と隣のもみじの葉を見比べたら、よく似ているが、よく観察すると微妙な違いがあることを発見した孫良は、この図表を塾で書いたとのことです。やりたいことをやらせてくれる塾なのです。

『いなべんの哲学』シリーズ第1巻で、「7歳の孫良の哲学」と題して紹介した『生きているということ』という詩も、孫良が小学校2年生の夏に、菅原学習塾で書いたものです。ジジイは、この詩にも惚れて、駄文の中に取り上げました。菅原学習塾の成果だと思っています。菅原里江先生のご指導のお陰です。

菅原学習塾では、孫に毎回自分がやりたいことをやらせ、必要な時にアドバイスをするという指導方法をとっているようです。暗記勉強を強いるというやり方ではなく、子供の自主性・自発性を尊重し、それを伸ばしてやる、というやり方です。

孫は、週2回の塾には、行く前から、「今日はこれを勉強してくる」と決めているようです。今回は、「血液について調べてくる」と言っていました。ジジイ馬鹿ですが、孫の学校の成績は、悪くはありません。特に、「なぜ、こうなるのだろうか」と言う疑問と関心を持って、勉強するスタンス（姿勢）には、担任の先生も、「他に見たことがない位素晴らしい」と言ってくれる程です。菅原先生のお陰だと、感謝しています。

いなべん だべんく
田舎弁護士の駄弁句 ⑤4

先生の 本読み返し 乗り越えた
その一言に 止まらぬ涙

令和元年9月1日

青空浮世乃捨

「大病で、死を覚悟しました。自殺も考えるほど辛い思いをしました。その都度、先生の本を繰り返し、繰り返し読んで、気持ちを変えて乗り切りました。お陰様で、手術が成功し、こんなに元気になりました」と夫と息子を同道し、来所した60代半ば位の女性は語ってくれたのです。

今、令和元（2019）年9月1日、午前3時ですが、いつものように駄文を書いています。『人生は、いまの一瞬を、まわりの人といっしょに、楽しみ尽くすのみです』と言う『いなべんの哲学の道歌集その1』の原稿に手を入れている途中でしたが、突然、昨日のご婦人の顔と、その言葉が浮かんできたら、涙が流れたのです。

「前回お会いした時より、20歳は若く見える」と思わず言いましたが、同席していた2人の事務局も心の底から頷いていました。黒ずんでいた顔色は、色白で美しく透明感が出て、シワもなくなり、ツヤツヤし、どんなに控え目に見ても20歳は若く見えるのです。「こんなにきれいな人だったんだ」と思いました。これはお世辞でないのです。びっくりしてしまいました。

重篤^{じゅうとく}な心臓病だったのですが、前向きな心を持ち続け、あきらめずに治療を続け、大手術を経て、再生したのです。本当に良かった。昨日のご婦人のニコニコとして、「先生のお陰です」と何度も、何度も頭を下げてくれる姿が目につかび、この句を詠みました。

私は、嬉しくて仕方がないのです。私の駄文を繰り返し、繰り返し読んでくれたというのです。読んでくれただけでも嬉しいのに、「苦しい時には、必ず先生の本を読み返し、乗り越えた。そのお陰で、このように元気になりました」と言ってくれたのです。死を覚悟したのに完治し、20歳以上も若返って、生還したのです。きれいになって生還したのです。

私の駄文が役立ったと言って戴き、嬉しくて仕方がないのです。これだけで、「いつ死んでも悔いは無い」、「我が人生に悔いは無い」という思いがし、「生まれて来てよかった」、「生きて来てよかった」、「他人の役に立ててよかった」、「書いて来てよかった」という思いが湧いて、感無量となりました。

いつも、「こんなものを書いて誰も読んでくれないだろう」と思いながら書いているだけに、こんな風に言ってもらうと、文字通り昇天するほど嬉しいのです。「死んでもいい」と思うほど嬉しいのです。

誰も読んでくれないだろうと思いながら、116冊の駄文を書き、これをほとんど謹呈と称して送り付け、皆様の目を汚し、ゴミを増やし、皆様から頂戴した弁護士料を浪費し、何をやっているのだろうかかと自責の念で苛む身としては、「やっと、やっと報いられた」と40年間の思いが堰を切ったように流れたのです。

生きていれば、嫌なこともあります。時には、「生まれてこなければよかった」と思うこともあります。「誰かの役に立っているのだろうか」と自分の生き方に疑問を感じることも少なくありません。

ですが、このご婦人の姿と言葉によって救われました。このように言ってくれる方が一人でもいてくれたのです。もうこれで生まれてきた甲斐がありました。そう思うと、涙が止まらないのです。涙を滲ませながら、これを書いています。本当にありがとうございます。

いなべん だべんく
田舎弁護士の駄弁句 ⑤⑤

いつまでも あると思うな 親と金
ないと思うな 梗塞と痴呆

『いなべんの哲学』（白い本）シリーズの第3巻『いなべんの哲学の道歌集その1』の原稿がほぼ出来上がりました。それを書き出したきっかけとなった岩手県一関市の医師・佐藤誠之先生せいしの句です。その句に対する私のコメントを転載します。

私は、本を書くようになって、いつかは生き方について書いてみたいと思っていました。そのために、法律や医療の本を書いてきました。『大人の童話』などという本も書きました。ですが、生き方の問題は、哲学と言えなくもありません。哲学を書くには、まだ機じやくが熟していないと考えていました。

それを知った85歳で病院の院長先生として現役を張っている岩手県一関市の佐藤誠之先生せいしが、この一句を添えて、早く書くようにと背中を押してくれました。

先生のこの句で、はっと気が付きました。もう後期高齢者となった身としては、脳梗塞ひとごとや痴呆は他人事ではなく、自分がいつ脳梗塞や痴呆となるか分からないのです。早く書いておかなければ、書けなくなりそうです。

「人は、どう生きるべきか」などという問題は、いくら考えたって不変な正解など出ないのです。ものごとは、たえず変わるという「無常」の代表とも言えるのです。機が熟することなどないのです。たえず変わるので、いまは、いまの考えを書けばよいのです。考えが変わったら、また書けばよいと、腹が決まりました。佐藤誠之先生の道歌のお陰です。

腹が決まるや、直ちに書き始めたのが、いなべんの哲学（第1巻）『人生は、いまの一瞬を、まわりの人といっしょに、楽しみ尽くすのみです。—いなべんの哲学の意義』でした。

佐藤先生のこの道歌が導火線となって、いなべんの哲学は火がついたのです。先生のこの一句は、『いなべんの哲学』を書く直接のきっかけとなったものです。この句は、橋本先生が紹介し、解説して下さった句と共に、この本ではまず、紹介しなければならない句です。

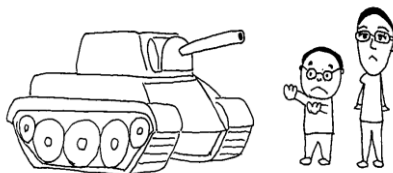
橋本先生が紹介して下さった松平定信の「田楽の 串々思う 心から 焼いたがうへに 味噌をつけるな」と佐藤先生のこの句は、いなべんの駄弁句ではありませんが、『いなべんの哲学—道歌集』においては、どうしても最初に紹介しなければならない道歌です。

私にとっては、まさに橋本先生の教えておられる、「教訓を歌で示した道歌」そのものです。佐藤先生に「ないと思うな 梗塞と痴呆」と言われ、ハッと気が付き、哲学の本を発刊することにしたのですから、「哲学の本を発刊する導火線となった道歌」ということになります。この二句は、いなべんの駄弁句に入る前に紹介しなければならない句です。

私は、運の良い男です。いつも何かしようと考えている時に、このように背中を押して下さる人が出現します。このような方は、この世における私の阿弥陀様あみださまです。この世で、私を極楽浄土へ導いてくれる方なのです。

後で紹介しますが、「ありがたや あゝありがたや ありがたや 巡り会えた いい時 いい人」の駄弁句のように、今回も橋本先生と佐藤先生のおかげで、この本を発行することができます。

ミサイルよりも保育園を —税金は私たち国民のために使って—



上記表題の『東京法律事務所たより』を頂戴しました。その内容は、全面的に共鳴します。分かり易く、税金は兵器購入に使われてはならないと訴えています。

私は、戦争は二度とあってはならないという思いで凝り固まっています。私の60兆個の細胞は、全て「戦争絶対反対」と叫んでいます。人間を殺す兵器は、絶対にあってはならないものです。日本国憲法第9条は、第1項で、「戦争と武力の行使を放棄する」と宣言し、第2項では、「陸海空軍その他の戦力は、保持しない」と明言しています。

この世に生まれた人間は、誰だって、一度限りの人生を幸せに生きたいのです。国家が、この個人の命や人権を、武力を使って奪うなどと言うことは、絶対に許されないのです。戦争のもたらす悲惨な結果は、いまさら言うまでもありません。戦争ほど重い犯罪は他にはありません。私は、戦争には命を懸けて反対します。

私の哲学は、『人生は、いまの一瞬を、まわりの人といっしょに、楽しみ尽くすのみです』というものです。私の考え方、生き方からすれば、兵器購入のために協力は絶対できません。それは、戦争に協力することになり、国家が人命や人権を奪うことに協力する結果になるからです。

普段から、そう考えている身としては、この『東京法律事務所たより』は、全面そのまま紹介したいのですが、紙面に制限がありますので、一部だけを紹介します。

書き出し部分には、次のように書かれています。

安保関連法（戦争法）の強行採決から約4年が過ぎ、日本は際限のない軍拡の道へと突き進んでいます。軍事予算が膨らんでいけば、社会保障予算などにも大きなしわ寄せがくることは明らかで、国民生活にとっても重大な問題です。

その通りだと思います。ですが私は、軍事予算が膨らむことによって、他の予算にしわ寄せがくることも気にはなりますが、兵器に金を使うことは、1円なりとも許せないのです。

人間の生命・人権を奪う目的の兵器を、日本国が持つことは、絶対に許せないのです。私の納めた税金の1円だって、兵器購入に使われることは許せません。私の生き方に反します。私は、命を懸けて日本国が兵器を購入することに反対します。

『東京法律事務所たより』の記事は、「安倍政権による際限のない軍拡」という見出しで、次のように書いています。

安倍政権は昨年末に今後10年の防衛力整備のガイドラインとなる「防衛計画の大綱」を策定し、そこでは際限のない軍拡へと進む未来が浮き彫りになりました。

例えば、イージス・アショア2基を秋田県と山口県に配備することや、攻撃型最新鋭ステルス機F35を147機購入するといった内容です。さらには、護衛艦「いずも」「かが」を空母化し、F35の離発着を可能にすることも決定しました。

その後の説明では、「F35戦闘機を147機購入すると、その購入費だけで1.7兆円以上がかかります。この金額は88.6万人分の保育の受け皿を整備する費用1.4兆円を大きく上回っています」と述べています。

私は、金額の大きさにも驚きましたが、その金額の大小より、日本国が兵器購入することは、絶対に許せないのです。私の納める税金はわずかですが、1円なりとも兵器購入に使ってもらっては困ります。私は戦争に協力することになります。そんなことは、私の60兆個の細胞は、許さないのです。

『東京法律事務所たより』の記事は、更に次のように述べています。

ここで重要な点は3つあります。

1つ目は、これらは明らかに憲法の定める「専守防衛」に違反しているという事です。

2つ目は、このような兵器を購入する結果、軍事費の増加に歯止めがかからず、安倍政権下で軍事費が6年連続で増加していることです。

3つ目は、大量購入する兵器がいずれもアメリカ製という点です。これはトランプ大統領の「バイアメリカン（米国製品を買え!）」という要求に屈した結果です。

私は、この記事には深く共鳴し、このみのる法律事務所便り『^{まとはずれ}的 外』で紹介させて戴いていますが、兵器は、人命・人権を奪う道具であり、絶対悪です。兵器購入に協力することは、私の生き方として、絶対にできません。

「兵器増強のための納税はできない」と語って、投獄された人が、どこかの国でいたという話を聞いたことがあったような気がしますが、その人の生き方には感動します。「兵器購入のために税金を納めることは、犯罪ではなかろうか」とさえ思えます。

国民に納税の義務があることは当然です。ですが、苦しい中から納めた税金が、人命や人権を奪う兵器購入資金に、時の権力者が使うということは、許せません。

納税義務者である国民は、安倍政権によって、アメリカから大量の兵器購入されている事実を知っているのでしょうか。知らないうちに、最も重い犯罪行為に手を貸してはいないのでしょうか。

新刊書発刊のご案内

－ 『いなべんの哲学の道歌集その1』

『人生は、いまの一瞬を、まわりの人といっしょに、楽しみ尽くすのみです』という『いなべんの哲学』（白い本）シリーズの第3巻の原稿ができました。間もなく、三陸印刷株式会社さんに入稿予定です。

冒頭の、田舎弁護士の駄弁句⑤②のコメントでも述べましたが、毎日少しずつ読んで戴けるように、30句の駄弁句にして、『道歌集その1』という格好にしました。

『道歌集その1』で紹介した最初の駄弁句は、「つまみ食い あんなに旨いものなのに 食べ放題では さほどでもなし」です。

その句の後に、次のようなコメントを述べました。

命には限りがあり、金にも、行動にも制約があります。いつまでも生きてはられません。使いたい放題、やりたい放題はできません。命に限りがあること、金にも行動にも制約があることをどのように捉えるか。それこそ、生き方の問題であり、哲学の問題です。

簡潔に言ってしまうと、「制約ばかりの人生なんて最低だ。生まれてこなければよかった」とネガティブ（消極的、否定的）に捉えるか、「制約があるからこそ楽しいのだ。限りある命、制約ある人生を目一杯楽しみ尽くしてやる」とポジティブ（積極的、肯定的）に捉えるか、とすることに尽きると思います。

哲学などというとなんか難しく考えてしまいがちですが、このような道歌、狂歌、川柳とそのコメントという格好で、『人生は、いまの一瞬を、まわりの人といっしょに、楽しみ尽くすのみです』という『いなべんの哲学』を知らせたいのです。